

倉庫の記録

その日

いちめん蓮の葉が馬蹄型（ばていがた）に焼けた蓮畑の中の、そこは陸軍被服廠倉庫の二階。高い格子窓だけのうす暗いコンクリートの床。そのうえに軍用毛布を一枚敷いて、逃げて来た者たちが向きむきに横はつている。みんなかるうじてズロースやモンペの切れはしを腰にまとった裸体。

足のふみ場もなくころがっているのはおおかた疎開家屋の跡片付に出ていた女学校の下級生だが、顔から全身えかけての火傷や、赤チン、凝血、油薬、繻帯などのために汚穢（おわい）な変貌をしてももの乞の老婆の群のよう。

壁ぎわや太い柱の陰に桶や馬穴が汚物をいっぱい溜め、そこらに糞便をながし、骨を刺す異臭のなか

「助けて おとうちゃん たすけて

「みづ、水だわ！ ああうれしいうれしいわ

「五十銭！これが五十銭よ！

「のけて 足のとこの 死んだの のけて

声はたかくほそくとめどもなく、すでに頭を犯されたものもあって半ばはもう動かぬ屍体だがとりのける人手もない。ときおり娘をさがす親が嚴重な防空服装で入って来て、似た顔だちやもんぺの縞目をおろおろとのぞいて廻る。それを知ると少女たちの声はひとしきり必死に水と助けを求めぬ。

「おぢさんミツ！ミツをくんできて！」

髪のない、片目がひきつり全身むくみかけてきたむすめが柱のかげから半身を起し、へしゃげた水筒をさしあげふってみせ、いつまでもあきらめずにくり返していたが、やけどに水はいけないときかされているおとなは決してそれにとりあわなかつたので、多くの少女は叫びつかれうらめしげに声をおとし、その子もやがて柱のかげに崩折れる。

灯のない倉庫は遠く燃えつつけるまちの響きを地につたわせ、衰えては高まる狂声をこめて夜の闇にのまれてゆく。

二日目

あさ、静かな、嘘のようなしづかな日。床の群はなかばに減つてきのうの叫び声はない。のこった者たちの体はいちように青銅いろに膨れ、腕が太股なのか太ももが腹なのか、焼けちぢれたひとにぎりの毛髪と、腋毛と、幼い恥毛との隈が、入り乱れた四肢とからだの歪んだ線のくぼみに動かぬ陰影をよどませ、鈍くしろい眼だけがそのよどみに細くとろけ残る。

ところどころに娘をみつけた父母が跣（かが）んでなにかを飲ませてい、枕もとの金ダライに梅干しをうかべたうすい粥が、蠅のたまり場となつている。

飛行機に似た爆音がするとギョツと身をよちるみなな気配のなかに動かぬ影となつてゆくものがまたもふえ、その影のそばでみつけるK夫人の眼。

三日め

K夫人の容態、呼吸三〇、脈搏一〇〇、火傷部位、顔面半ば、背中全面、腰少し、両踵発熱あり、食慾皆無、みんなの狂声を黙って視ていた午前中までのしろい眼に熱気が浮いて、糞尿桶にまたがりすがる手の慄（ふる）え。水のまして、お茶のまして、生瓜もみがたべたい、とゆうがた錯乱してゆくことば。

硫黄島に死んだ夫の記憶は腕から、近所に預けて勤勞奉仕に出てきた幼児の姿は眼の中からくづれ落ちて、爛れた肉体からはづれゆく本能の悶え。

四日め

しるく烈しい水様下痢、まつげの焦げた眼がつりあがり、もう微笑の影も走ることなく、火傷部のすべての化膿。火傷には油を、下痢にはげんのしょうこをだけ。そしてやがて下痢に血がまぢりはじめ、紫の、紅の、こまかい斑点がのこった皮膚に現れはじめ、つる嘔吐の呻きのあいまに、このタバひそひそとアツツ島奪還の噂がつつえられる。

五日め

手をやるだけでぬけ落る髪、化膿部に蛆がかたまり、掘るとぼろぼろ落ち、床に散つてまた膿に這いよる。

足の踏み場もなかった倉庫は、のこる者だけでがらんとし、あちらの隅、こちらの陰にむくみきつた絶望の人と、二、三人のみとりてが暗い顔で蠢き、傷にたかる蠅を追う。高窓からの陽が、しみのついた床を移動すると、早くから夕闇がしのび、ローソクの灯をたよりに次の収容所え肉親をたずねて去る人たちを、床にころがった面のような表情が見おこっている。

六日め

向うの柱のかけで全身の繃帯から眼だけ出している若い工員が、ほそぼそと「君が代」をうたう。

「敵のB29が何だ、われに零戦、はやてがある——敵はつけあがっている、もうすこし、みんなもうすこしの辛棒だ——」と絶えだえの熱い息。

しつかりしなさい、眠んなさい、小母さんと呼んでくれればすぐきてあげるから、と隣りの頭を布で巻いた片眼の女がいざりよって声をかける。

「小母さん？おばさんぢやない、お母さん、おかあさんだ！」

腕は動かさず、脂汗のじむ黒黒（あかぐる）い頬骨をぢりぢりかたむけ、ぎらつく双眼から涙が二筋、繃帯のしたにながれこむ。

七日め

空虚な倉庫のうす闇、あちらの隅に終日すすり泣く人影と、この柱のかけに石のように黙って時々胸を弓なりに喘がせる最後の負傷者と。

八日め

がらんだうになつた倉庫。歪んだ鉄格子の空に、きょうも外の空地に積みあげた死屍からの煙があがる。

柱の蔭から、ふと水筒をふる手があつて、無数の眼だまがおびえて重なる暗い壁。

K夫人も死んだ。

——収容者なし、死亡者誰々——

門前に貼り出された紙片に墨汁が乾き

むしりとられた蓮の花片が、敷石のうえに白く散っている。